

審査員特別賞

あたたかい、心のつながり

福岡県 福岡中学校 二年
久保 音彩

2020年からずっと、どのテレビ番組やニュースを見ても『コロナウイルス感染』、『コロナ禍なのに飲み会!?!』といった報道が行われています。正直、私にとってはつまらなく、福岡といっても、都市部でない私たちの住んでいるところでは、関係のない話、遠い存在のものだと思っていました。住んでいる市内で感染者が出た、と聞いてもなんだか実感がわかず、危機感はありませんでした。

しかし、ある日、私のお母さんが働いている病院に、コロナウイルスにかかった患者さんが来ることになりました。その日から、一つの病棟がコロナに感染してしまった方の専用になり、お母さんも担当になりました。そのため、「今後、家族にうつしてしまうかもしれない」という理由で、お母さんは長期間、ホテル暮らしとなってしまったのです。

こうして、私を取り巻く環境は一変しました。お母さんのいない家では、洗濯やご飯の準備など、さまざまな家事がいつもよりもまわらなくなりました。それだけでなく、当時、受験を控えていた兄の不安そうな顔や、小学生の弟のさみしそうな顔を見て、家の空気が変わってしまったことにも気がつきました。

ただ、お母さんは仕事が休みのときには家に帰ってきてくれたので、そのときの家族は大喜びでした。そして私は、今まで感じたことのないような、いつもと少し違う幸せを感じました。

その後、お母さんが再びホテル暮らしに戻ると、私は家の手伝いの大変さ、学校の勉強の難しさ、優しいお母さんのいないさみしさが重なり、イライラした気持ちといっしょに涙が出てしまうことがありました。

しかし、そんなときには兄が優しく話しかけてくれたり、弟やお父さんが遊んでくれました。また、お母さんと電話をしたりして、私は気持ちをリラックスさせることができました。

私はこのとき、お母さんが一時家に帰ってきたときに感じた幸せと似た気持ちになりました。そして、お母さんの仕事が落ち着いたことで、私たち家族の望んだ日常が帰ってきました。

この経験を通して、私は大切なことを学びました。それは、あの幸せを感じさせてくれた家族愛、家のあたたかさです。

今の時代では、まだまだコロナウイルスに関する怖いニュースがあり、そのたびに胸がしめつけられるような思いになります。しかし、今の私にはそれを受け止め、守り合うことのできる力があります。私の家族がそうしてくれたように、誰かのつらさを受け止めて、代わりに幸せを与えられるようにしていきたいです。

以前の私のように、無関心でいてしまう人もいるかもしれません。しかし、こんなときこそ、つながる大切さを大事にして、支え合える世の中になってほしいと願っています。